

岡山県王泊遺跡出土の成川式土器

池 烟 耕 一

1

王泊遺跡のある高島は、岡山県の西端にあたる笠岡から約8km沖にある周囲約4kmの小島である。この島の北側には4つの入り江があり、そのひとつは縄文時代晚期の標式遺跡として著名な黒土遺跡であり、その東方の入り江にあるのが王泊遺跡である。

高島は昭和10年代の前半に、神武天皇が東征の途中立ち寄ったとされる高島の宮の比定地として注目された。この確証を得るために、昭和18年から19年にかけて、山内清男氏・鶴久森経峯氏・京都大学などによって発掘調査が行われている。これら

のうち京都大学の調査した分は、昭和 31

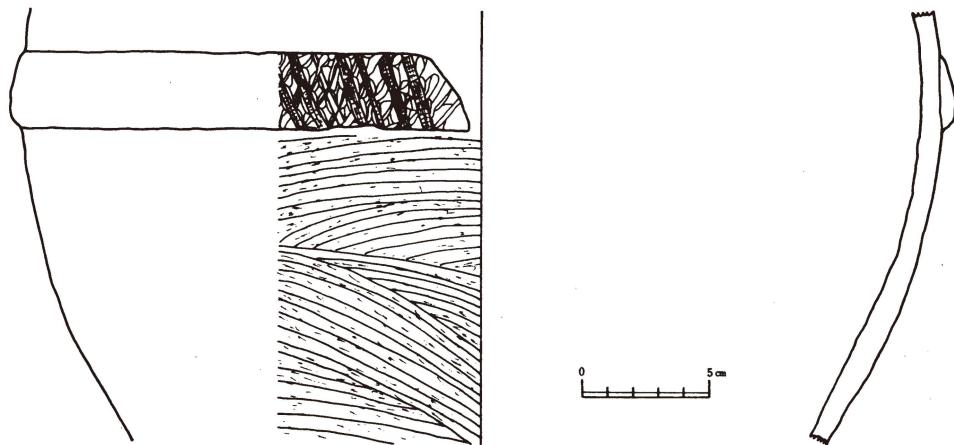
年に報告書が刊行され（註1），層序的に発掘された資料はその後，王泊6層，5層などと呼ばれ，古式土師器の基礎資料として使われた。

ここで紹介する資料は、現在、浅口郡金光町の金光図書館に収蔵されている。これは鶴久森氏の調査にかかるものであるが、地点・層位とも不明で、その共伴資料は不明である。

この小文を書くにあたり、資料の所在等色々な点について教示いただいた鎌木義昌先生、高橋護氏に心より謝意を表したい。また、金光図書館の皆さんには遺物の実測にあたり、色々と御面倒をかけ、お手伝いいただいた。本文を借りて謝意を表したい。

II

土器は壺形土器の腹部破片である。このゆるやかに彎曲する腹部に最大径があり、推定径36.5cmを測る。ここに幅3cmを測る幅広のかまぼこ形突帯が一条貼り付けてあるが、これは端部がくつついてなく、ややすれ違いになっている。突帯上は布を巻きつけたヘラ様施文具で、斜格子状に押圧が付されている。まず左下がり方向に付され、次に右方向の押圧が付される。したがって、右下がり方向は割合に整っているが、左下がり方向は乱れた感じになっている。外面は左上から右下へ向けて、ヘラ様のものでていねいになでてあるが、突帯の貼り付けられる部分は横方向に粗く削られ、貼り付けをたやすくしている。内面は剥脱が著しく、ほとんど旧状を残さないが、一部の残存部をみるとヘラ様なでらしい。胎土は細砂を多く含む砂質土で、少し赤みをおびた茶褐色を呈している。焼成は良く堅致である。



III

この土器は器厚・内面整形などから考えて、瀬戸内地方の土器とは違いをみせる。さらに腹部に斜格子の押圧をほどこす幅広突帯を有するのは成川式土器の特徴ともいえる。突帯がすれ違い、格子に布目を残すのも成川式土器にはよくみられる。胎土・色調・焼成度も似ている。この土器は、先の編年試案にあてはめると舷貫式土器に該当する。

南九州の土器の瀬戸内地方における出土は、すでに鎌木・高橋の両氏によって指摘されており、両氏はこれを古墳時代初期における西方文化の東への波及と解釈されている（註2）。しかし、先にも記したように舷貫式土器は須恵器と伴うものもあり5世紀以降のものと思われる。したがって、この資料は層位的に不明であるが、あえて述べれば王泊3層あたりに伴うものではなかろうか。この点についてはまた稿を変えて記したい。

筆者は先に棒状両端穿孔土錘の広がりについて記し（註3），鹿児島県にみられる隔絶した状況に注目したが、王泊遺跡においてもこの土錘が京都大学の発掘によって出土している。北九州・中九州にみられない土錘が、鹿児島県ではすでに4ヶ所に出土しているという事実は、成川式土器が岡山県まで運ばれているという事実と考えあわせ、5・6世紀における鹿児島と畿内との関係を物語っているといえよう。

なお、鶴久森氏はここを船泊りとしての交通路の要衝に當まれた集落と解されていたらしいが、この付近は瀬戸内海の潮が東西に分かれる地点であり、奈良時代に海の祭祀が行われたとされる大飛島遺跡も約40km南にある。とすれば、鹿児島から畿内へ出かける船が、この高島へ立ち寄り、潮待ちしたと考えることも可能であろう。

今後、こうした資料の蓄積によって色々の様相が鮮明となってこよう。

（註1）坪井清足『岡山県笠岡市高島遺蹟調査報告』岡山県高島遺蹟調査委員会 1956年

（註2）鎌木義昌・高橋護「古墳文化各説——四国・中国」『新版考古学講座』第5巻 雄山閣 1970年

（註3）池畠耕一「隼人の漁撈生活」『隼人文化』第5号 1979年